

## 太極柔力球実施者の特性に関する日中比較研究

戴 璐 仲野 隆士 長見 真

### A Comparison of Characteristics Between Chinese and Japanese Players of Tai-chi Rou-li ball

Dai lu Nakano takashi Nagami makoto

#### Abstract

The Tai-chi Rou-li ball is a kind of new sporting games which contrived in China in 1991. The movement of Tai-chi Rou-li ball originates to Tai-chi-chuan, and the contents and original rules develops from there. Nowadays, Tai-chi Rou-li ball is played in Asian-pacific region such as Japan and Australia.

The purpose of this study is to compare the characteristics between Chinese and Japanese players of Tai chi Rou li ball. The data for this study were collected from 187 Chinese players and 113 Japanese players, a interview was conducted Chinese top instructor of Tai-chi Rou-li ball.

The main results are as follows:

1. Above 80% of the players were woman in Japan and 90% in China.
2. Above 60% of Chinese players practice in groups. On the other hand, Japanese players usually do it in person.
3. Chinese and Japanese players enjoy one or two kinds of leisure sports other than Tai-chi Rou-li ball.
4. In terms of occupation, above 70% of Chinese players were jobholders, and 90% of Japanese players were retired people.
5. In terms of playing frequency of the Tai-chi Rou-li ball, Chinese players do it almost every day, yet Japanese players do it once a week.

The results showed that the characteristics between Chinese and Japanese players of Tai chi Rou li ball was clearly differs. Therefore, each country has different circumstances and problems which now confronts.

## 一. 緒言 (研究の背景)

### 第一節. ニュースポーツの概要

「ニュースポーツ」をどのように捉え、定義したらよいかは明確になっていないのが現状である。そこで、本研究ではニュースポーツを次のように定義することにする。「ニュースポーツとは、いつでも、どこでも、誰でも、老若男女を問わず、気軽にスポーツを楽しめることを目的に、既存のスポーツのルールや道具を改良されたもの、軽スポーツ、ミニスポーツ、柔らかいスポーツと類似するスポーツである。」

日本におけるニュースポーツは、生涯スポーツ振興施策の支援もあり、全国各地で各種団体や行政がタイアップした大会や講習会などのイベントが開催され、体育指導員をはじめ多くの愛好者により長年にわたって普及活動が展開されてきた。しかし、多くの種目が認知度の低さや関連情報の不足、さらには用具の確保、施設などハード面の整備も欠けている状況である。特に愛好者として継続的な活動を支えるメンバーの確保もさることながら、指導者となる人材は絶対的に不足しており、普及の基盤となる組織を支えるための資源の確保など、今後、乗り越えるべき課題も少なくない。

中国におけるニュースポーツは、現在、注目されつつあり、政府も力を入れている。しかしながら、まだまだ国民の認識は低く、多くの問題や課題が存在しているのが現状である。

## 二. 研究の目的

### 第一節. 研究の目的

中国は5千年の歴史を持つ国として、多種多様な伝統的種目が存在している。しかしながら、太極柔力球が考案されてから、ニュースポーツという言葉が使われ出した段階であり、様々な問題を抱えている。一方、日本の場合は、ニュースポーツは盛んであ

り発展している状況の中で太極柔力球が導入された。その日本において、太極柔力球という種目はどのように受け入れられたのか、実施者にはどのような特性があるのか、太極柔力球はニュースポーツとして、どのように発展すればよいのかという問題に対し、日中の実施者の特性の比較を通して現状や課題などを明らかにすることが本研究の目的である。

## 三. 研究方法

### 第一節. 調査対象

本研究では、中国の太極柔力球実施者及び日本の太極柔力球実施者を調査の対象とした。中国では、北京や他の地域でも実施者が存在するか、中国の東北に位置する瀋陽市にある公園で実際に太極柔力球を実施している人達及びグループを研究対象にし、アンケート調査をすることにした。

日本では、実施者は全国に存在するが、日本太極柔力球協会のみが情報を把握していることから、協会に調査の協力を依頼して実施することにした。

### 第二節. 調査方法

調査の方法は、調査員2名が1ヶ月の期間、朝6時～8時の間に集まる実施者に調査の協力を依頼し、実施後に記入し回収した。

日本では、実施者は全国に存在するが、日本太極柔力球協会のみが情報を把握していることから、協会に調査の協力を依頼して実施することにした。しかしながら、会員の住所については個人情報であり、教えられないという問題がであった。しかし、協会が主催する指導者養成講習会等に参加する参加者への調査なら許可するという回答が得られた。そこで、講習会に調査員2名が出向き、調査することにした。また、太極柔力球の現状や課題等については、同協会の役員へのヒアリング、また、中国からの講師そし

て講習会に来られた指導者に対してもヒアリング調査を実施した。

### 第三節. 調査期間

日本の調査は、調査1として平成23年8月22日・平成23年8月23日の2日間で実施した。また、調査2として12月追加調査を実施した。中国では、平成23年8月3日から9月2日までの期間でアンケート調査を実施した。

### 第四節. 回収数及び回収率

本研究における回収数及び回収率は、表に示すとおりである。中国瀋陽の公園で、250枚の質問紙を配布した。回収率は82.8%であった。回収数207件の内、有効な回答を得られたのは187件、有効回答率は90.8%であった。

表1. 中国の調査概要

配布数	回収数	回収率	有効回答数	有効回答率
250	207	82.8%	187	90.8%

日本における調査1は、日本太極柔力球協会が主催した2日間の指導者養成講習会(埼玉県川口市蕨市体育館)に参加した参加者32名に対し、調査の主旨を説明して配布し、1日目の終わりに回収した。その結果、24名からの回答が得られた。

調査2は、同協会が12月に東京で実施する指導者養成講習会に参加する参加者を中心に調査を実施した。最終的に、113件のサンプルを回収することができた。

表2. 日本の調査概要

配布数	回収数	回収率	有効回答数	有効回答率
135	120	83.70%	113	94.17%

## 四. 調査内容

### 第一節. 変数の操作

本研究では、目的を達成するために以下の手順で各変数を操作し分析に用いる。太極柔力球を行う現状、期待、満足、困難に関しては、それぞれ否定的評価を1、肯定的評価を5とした5段階リッカートタイプ尺度を用いて回答を求めた。

### 第二節. 分析方法

分析では、太極柔力球実施者の個人属性、期待、満足、太極柔力球を行う現状および問題を明らかにするために、単純集計結果を元に、全体像の把握を試みた。さらに、太極柔力球を実施する期待や満足度や問題など年齢層や経験年数の違いに着目し、分散分析を行った(F検定)。また、性差としてT検定を行った。また、クロス集計を実施し、有意差検定を行った。なお、これらの統計処理については、日本版spss11.5for windowsを用いた。

## 五. 結果と考察

### 1. 個人の属性の結果

個人の属性の結果は、以下の表3、4に示すとおりである。

表3. 中国個人の属性の結果

		N	%
職業	公務員	43	23
	会社員	100	53.5
	アルバイト	11	5.9
	無職	10	5.3
	主婦	21	11.2
性別	その他	2	1.1
	男性	17	9.1
年齢	女性	170	90.9
	最小年齢	16歳	
	最大年齢	78歳	
世帯構成	平均年齢	59歳	
	一人暮らし	12	6.4
	配偶者と二人(夫婦)	3	1.6
	子供やその家族と同居	109	58.3
年齢層	親と同居		0
	その他	63	33.7
	~54歳まで	44	23.5
	55~64歳まで	90	48.1
	65歳から~	53	48.1

表4. 日本個人の属性の結果

		N	%
職業	公務員	2	1.8
	会社員	12	10.6
	アルバイト	5	4.4
	無職	11	9.7
	主婦	72	63.7
	その他	11	9.7
性別	男性	20	17.7
	女性	93	82.3
年齢	最小年齢	35歳	
	最大年齢	92歳	
	平均年齢	65.2歳	
世帯構成	一人暮らし	16	14.2
	配偶者と二人(夫婦)	57	50.4
	子供やその家族と同居	31	27.4
	親と同居	3	2.7
	その他	6	5.3
年齢層	~54歳まで	23	20.4
	55~64歳まで	22	19.5
	65歳から~	68	60.2

## 2. 日中の比較結果と考察

サンプルの属性は、図1~8のとおりである。「性別」は、中国は「女性」が90.9%と、全体の約9割を占めている。「男性」は9.1%であり、全体の約1割であった。日本では「女性」が82.3%と、全体の8割を占めている。「男性」は17.7%であり、全体の約2割を占めた。この性別の極端な偏りについては、両国とも男性より女性の方が興味を示し、実施への意欲が強い。その理由は、太極柔力球の特徴からすれば、柔軟性が必要とされるとともに原因がありそうである。つまり、男女の特徴から、一般的に女性は男性より柔軟性があり、太極柔力球により強い関心を持ち、自ら積極的に太極柔力球をやりたいという意欲が高いのではないかと考えられる。また、中国の男性実施者の割合より、日本の男性実施者の割合が高かった。1太極柔力球の男性実施者の人数を増がせるかどうかは今後の課題である。統計的にも5%水準で有意差が認められた。

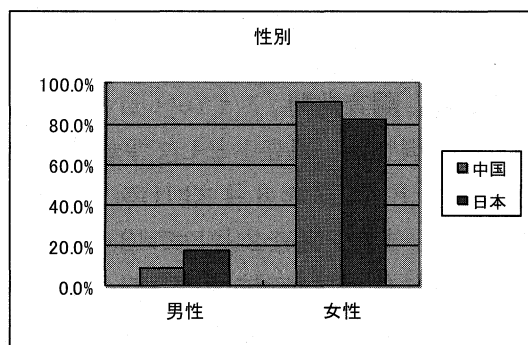


図1. 性別

「年齢」では、中国の実施者の最小年齢は16歳で、最高年齢は78歳で、平均年齢は59.7歳であった。日本の実施者の最小年齢は35歳で、最高年齢は92歳で、平均年齢は65.2歳であった。平均年齢は中国より日本の実施者の平均年齢の方が高かった。日本では青少年実施者はいなかった。これらの結果から、太極柔力球は日本に導入されたばかりで、高齢者スポーツとして取り入れられている傾向にあることが考えられる。

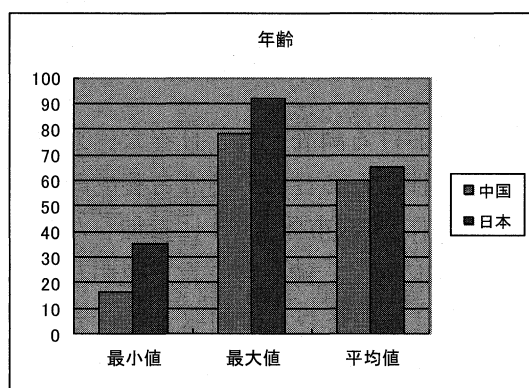


図2. 年齢

両国太極柔力球の活動年数については、差が認められた。中国の実施者は3年と回答したが最も多くに対し、日本の実施者は1年と回答したが多く。違いが反映されたといえる。

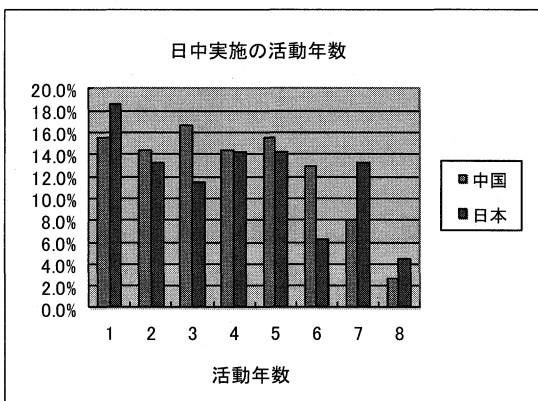


図3. 太極柔力球実施年数

中国と日本における月あたりの活動頻度をみると、中国では「月 26~30 回」と回答したのは、全体の 78.1%であった。これに対し、日本では、全体の 0.9%であった。いずれにしても、中国における実施者の多くはほぼ毎日実施しており、朝の公園で太極柔力球を実施することが日課となっている傾向が強いことが明らかになった。つまり、日常化、生活化しているわけである。また、日本では太極柔力球を導入したばかりなので、太極柔力球活動がまだ日常化、生活化していないといえる。

「一回当りの活動時間」をみると、中国と日本とも「1 時間~2 時間」が最も多い。中国では、全体の 69.5%に対し、日本では、全体の 56.6%であった。「30 分~1 時間」と回答

したのは、中国では、全体の 12.3%に対し、日本では、全体の 16.8%であった。これらの結果から、太極柔力球の活動時間は、「1 時間~2 時間」が一般的のようである。また、日本の実施者より中国の実施者の活動時間が長かった。

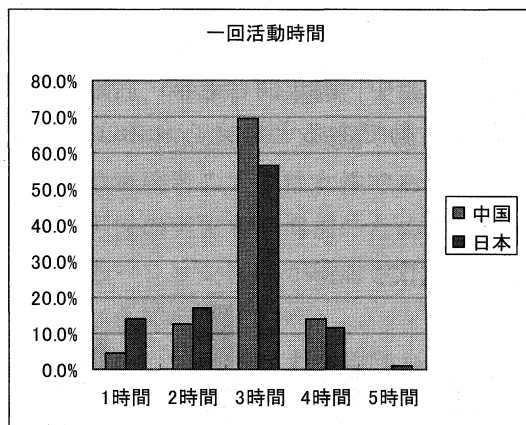


図5. 一回当りの活動時間

情報源については、中国の場合は「友達」と回答したのが最も多く、全体の 35.3%を占めた。日本の場合は、「指導者」と回答したのが最も多く、全体の 90.3%を占めた。この結果から、中国の場合は口コミやテレビや本から情報を得ているのが多いが、日本の場合は、殆どの情報が指導者からのようである。

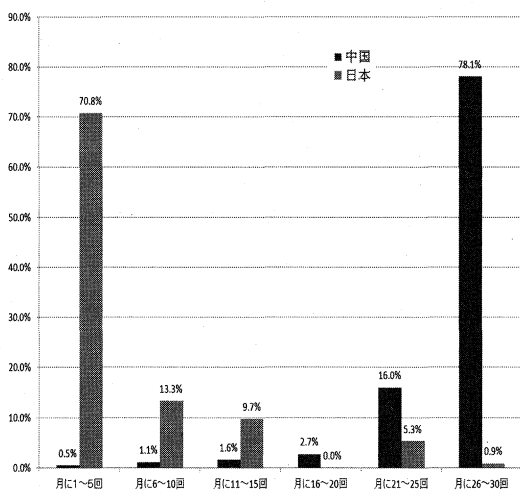


図4. 月当たりの活動頻度

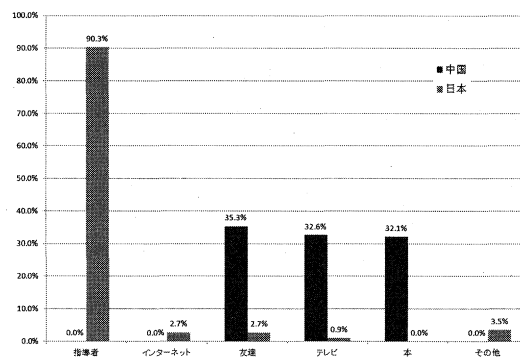


図6. 情報手入先

太極柔力球が、各年層にどの程度適しているかについて T 検定で比較した。中国では、太極柔力球が児童期、青年期、中・高年期、老年・高齢期に合う。特に、中・高年期

に最も合うと考えていた。日本では、児童期と青年期には合わなく、中・高年期と老年・高齢期に合うと考えている。特に、老年・高齢期に最も合うと考えている。児童期、青年期、老年・高齢期のところで、差が認められたが、中・高年期のところで、差が認められなかった。太極柔力球は中国では、全ての年齢層に合う活動であるというが、日本では、中・高年期と老年・高齢期だけに合う活動であると考えられるようである。

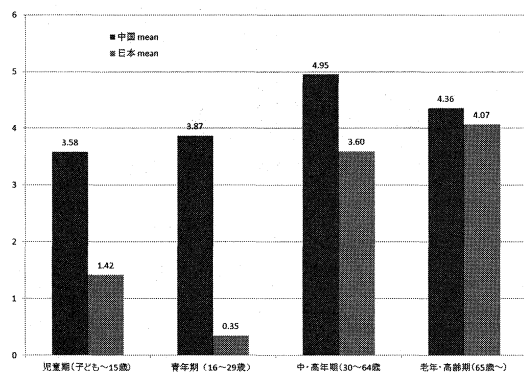


図7. 合っていると思う年齢層

「一緒に活動する人」をみると、中国と日本とも「運動を通じて知った仲間と一緒に」が全体の60%以上を占めた。具体的には、中国では全体の73.3%に対し、日本では全体の63.7%と、日本の割合が中国を10ポイント上回った。また、中国の実施者は「一人で」と回答した人が11.6%に対し、日本では13.3%であった。中国と日本とも「家族と一緒に」と回答した人がほぼ同じであった。中国と日本とも、運動を通じて知った仲間や友達と一緒に活動する人が多いこととわかった。

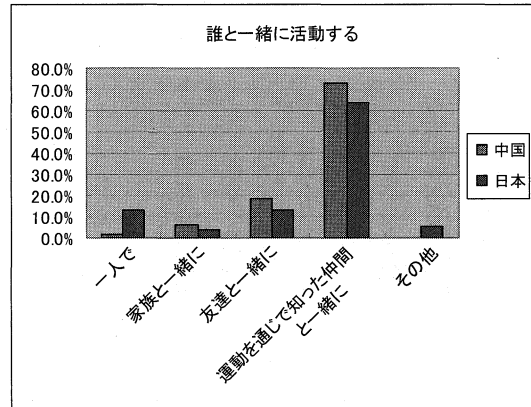


図8. 誰と一緒に活動するか

## 六. 結論

太極柔力球はニュースポーツとして、いかに、またはどのように発展すればよいのかという問題に対し、日中の実施者の特性の比較として現状や課題などを明らかにすることが本研究の目的であった。具体的には、太極柔力球の歴史や特性を明らかにすること、それを支える思想を考察すること、中国人及び日本人の健康観を考察することを課題とした。

- ①中国における実施者の75%は仕事を持っている労働者で構成されていることがわかった。限職後の実施者が多いと予側していたが、実際には少なかった。日本では限職後の実施者が多かった。
- ②世帯構成にみると、中国の実施者は夫婦二人や子供やその家族一緒に生活していることがわかった。日本の実施者は「配偶者と二人(夫婦)」が50.4%と最も多く、全体の5割を占めている。次いで「子供やその家族と同居」が27.4%であった。
- ③中国の実施者が「競技スポーツ経験の有無」は、「無」が81.3%と最も多く、全体の約8割を占めていた。日本の実施者が「競技スポーツ経験の有無」は、「無」が54.9%であった、「有」が45.1%であった。
- ④中国の実施者が「太極柔力球の試合参加経験の有無」は、「有」が66.8%と最も多

- く、全体の約7割を占めている。「無」が、全体の約3割を占めていた。日本の実施者が「太極柔力球の試合参加経験の有無」は、「無」が50.4%で、「有」が49.6%であった。
- ⑤中国と日本における月あたりの活動頻度を見ると、中国では「月26～30回」と回答したのは、全体の78.1%であった。これに対し、日本では、全体の0.9%で、日本の実施者より中国の数値が70%程度高かった。
- ⑥「一回当りの活動時間」をみると、日本の実施者より中国の実施者の活動時間が長かった。
- ⑦「一緒に活動する人」をみると、中国と日本とも「運動を通じて知った仲間と一緒に」が全体の60%以上を占めた。中国では全体の73.3%に対し、日本では全体の63.7%と、日本の割合が中国を10ポイント大きく上回った、また、中国の実施者は「一人で」と回答した人が1.6%に対し、日本では13.3%であった。
- ⑧「柔力球を知ったきっかけ」をみると、中国の場合は「友達」と回答したのが最も多く、全体の56.1%を占めた。日本の場合は、アンケート調査により、太極柔力球教室や講習会で指導者からの紹介で太極柔力球を知ったと回答したのが最も多く、全体の48.7%を占めた。
- ⑨国別に「情報はどこからわかる」をみると、中国の場合は「友達」と回答したのが最も多く、全体の35.3%を占めた。日本の場合は、「指導者」と回答したのが最も多く、全体の90.3%を占めた。
- ⑩「参加しているグループ人数」をみると、中国の場合は「40人以上」や「30人～39人未満」と回答したのが多く、日本の場合は、「10人～19人未満」と回答したのが最も多く、全体の40%を占めた。1%水準で統計的に有意差が認められた。

- ⑪太極柔力球をはじめたきっかけ」をみると、中国の場合は「友達に誘われた」と回答したのが最も多く、全体の38.5%を占めた。日本の場合は、「自らの意志」と回答したのが最も多く、全体の42.5%を占めた。

## 七. まとめ

- ①中国では、全国統一の組織（太極柔力球総協会）の設立が急務の課題である。
- ②中国の実施者の大半は女性であることから、男性の実施者の増加のためのPRやプロモーション戦略が検討され、実施されるべきである。
- ③中国では、協会に対する政府からの支援が不足しているのが現状である。よって、太極柔力球に対する支援を政府に対し、積極的に働きかけるべきである。
- ④日本では、太極柔力球の指導者が少ないため、指導者を育成することが重要である。
- ⑤日本では、太極柔力球に関するイベントや講習会行う回数が少ない。実施者を増加させるためにも、多種多様なイベントを展開すべきである。
- ⑥日本では、太極柔力球の認知度を高めるために、メディアを通じた宣伝も積極的に活用されるべきである。

## 八. 研究の限界

日本でのアンケート調査は、中国とは大きく異なった。日本太極柔力球協会主催の2回の指導者養成講習会でアンケート調査を実施した。それ上に、1回当りの回収数が少なかった。個人情報保護法という法律があるため、会員への郵送による調査ができなかったのである。そのため、地域による、実施の差があるかどうか判断できなかった。これらが、本研究の研究限界であるといえる。

## 九. 今後の課題

日本では圧倒的に知名度が低いということである。太極柔力球は、もともとは誰もが楽しめるようにと発案されたスポーツであり、さらには日本の高齢社会、またトータルヘルスを目指す現代社会においても、太極柔力球は心身の安定をもたらすのに有効なスポーツのひとつであると考えられる。つまり、太極柔力球を行うにあたって、「太極」という言葉にみえる難しい思想は必ずしも必要不可欠なものではなく、スポーツを楽しむことを目指すという動機で太極柔力球は十分に実践可能なのである。また、日本では主な普及団体が二つあるが、全国的な普及を目指すならば、全国で統一されたルールを作り、より多くの太極柔力球の指導者を育成しなければならないであろう。

中国では、普及のために、全国統一の組織を立たなければならない。また、地域のスポーツクラブや小・中学校の体育の種目として導入されるよう、具体的に働きかけなければならない。

## 参考文献

- 岸野雄三・稲垣正浩(1987)現代社会のスポーツ・日本体育協会監修・最新スポーツ大事典大修館書店.
- 陈钧・杨铁黎(2004)体育教学中游戏运用的方法与技巧・体育教学实用技能丛书,北京大学出版社.
- 黄彦军・刘玲(2006)体育游戏在体育教学中的意义及应用原则研究,黄河科技学院体育学院郑州河南.
- 稲垣正浩(1995)スポーツの後近代・スポーツ文化はどこへ行くの.三省堂、pp. 167, 170 - 172. ISBN 4385356750.
- 李恩荆(2006)太極柔力球的现状与发展对策.北京体育大学学报.
- 李小斌・田珊(2003)太極柔力球运动.人民体育出版社.

- 刘雪原(1996)太極柔力球赛收拍,工人日报综合体育版
- 野々宮徹(2000)ニュースポーツ用語事典遊戯社、pp. 244 - 245. ISBN 4896596250
- 仲野隆士(2007)スポーツの百科事典丸善、pp. 571 - 572. ISBN 9784621078310
- 「日本レクリエーション協会課程認定校WEB」:  
([http://school.recreation.jp/promise/calicuram\\_promise.php](http://school.recreation.jp/promise/calicuram_promise.php))
- 体育游戏教材编写组(1996)体育游戏,高等教育出版社.
- 全国体育体育学院教材委员会编写组(1996)武术,人民体育出版社.
- 张俊山(1995)太極思维与太極拳,北岳文艺出版社.
- 中国老年体协太極柔力球推广组(2002)太極柔力球教与学,北京体育大学出版社.